

明治時代から続く美術研究誌『國華』

『國華』は、明治22年(1889)、美術指導者、岡倉天心らによって創刊された日本・東洋美術専門の研究誌で、現在も刊行されている世界最古の美術雑誌です。

令和5年(2023)5月、「特輯 千住・足立の文化遺産」が生まれ、本誌ではじめて、仏教美術以外の絵画・工芸を中心とした分野において、市区町村を単位とした美術文化の実態を示す調査研究の成果が特集されました。



出展リスト

No.	作者	作品名・資料名	員数	年代	所蔵	展示期間
■文化遺産調査のはじまり						
1	村越向栄	十二力月花卉図屏風	六曲一双 (銀地押絵貼)	明治39年頃 (1906)	当館蔵 足立区登録有形文化財	4/26～5/25:右隻 5/27～6/29:左隻
■千住・足立の文化の成熟と生活への定着						
2	酒井抱一 下絵 原羊遊斎 蒔絵	筑波山に都鳥 墨切蒔絵大盃	一口	文化14年 (1817)	個人蔵 足立区登録有形文化財	通期
	大田南畝 箱書 谷文晁 句	筑波山に都鳥 墨切蒔絵大盃 共箱	一点	文化14年 (1817)	個人蔵	通期
3	村越其栄	秋草図屏風	六曲一隻	江戸時代後期	千住河原町 稻荷神社蔵	通期
4	鈴木其一 画 東耕舎米員 歌 関屋元	小督局・源仲国図	二枚	天保2年以前 (1831)	個人蔵 (当館寄託)	通期
	酒井抱一 編	光琳百図	一冊(合本)	文化12年頃 (1815)	個人蔵 (当館寄託)	通期
6	船津文洌	四季草花図小襖	四面	嘉永6年 (1853)	個人蔵 (当館寄託)	通期
■村越向栄の作品にみる千住・足立の生活文化						
7	村越向栄	四季草花図屏風	二曲一隻	明治時代	当館蔵	通期
8	村越向栄	秋草図	一幅	明治時代	当館蔵	通期
9	村越向栄	月次景物図	十二幅	明治時代	当館蔵 足立区登録有形文化財	4/26～5/25 →1月～6月 5/27～6/29 →7月～12月
10	村越向栄	八橋図屏風	六曲一隻	明治時代	個人蔵 (当館寄託) 足立区登録有形文化財	通期

編集・発行 足立区立郷土博物館
住所 〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
電話 03-3620-9393



琳派の美

表紙の作品



村越向栄 八橋図屏風
(明治時代 個人蔵・当館寄託)

令和7年(2025)4月にリニューアルオープンを迎えた郷土博物館は、平成24年(2012)の区制80周年を契機に文化遺産調査を本格化させ、展覧会でその成果を披露してきました。

こうした当館の活動が注目され、令和5年(2023)、明治時代から続く日本・東洋美術専門の研究誌『國華』において「特輯 千住・足立の文化遺産」が生まれ、足立の美術文化が広く世に紹介される機会を得たのです。

今回の企画展は、文化遺産調査のあゆみを踏まえ、『國華』掲載作品を中心に、前期・後期の二部構成で展開します。

前期となる本展では、琳派を中心とした作品を通じて、江戸時代後期から始まった千住・足立の人々と江戸の文人との文化的な交流と、そこで生まれた作品が家々の調度品として地域の暮らしの中に根付いていく様を伝えます。

後期(年度末開催予定)は、狩野派・谷派の粉本を中心にご紹介する予定です。「美と知性の宝庫 足立」の真髄を心ゆくまでご堪能ください。

千住の琳派絵師、村越向栄が手掛けた屏風です。千住の薬問屋、若田家に伝来しました。鮮やかな青い燕子花が群生する中に、ジグザグの八橋が描かれています。これらは『伊勢物語』の「東下り」にちなむ画題で、尾形光琳をはじめ琳派の絵師たちによって描かれてきました。

文化遺産調査のはじまり

平成21年(2009)、千住の旧家で村越向栄作《十二カ月花卉図屏風》が確認されました。
これを契機に、平成24年(2012)の区制80周年記念事業の一環としてはじまった区内資料の集中的な調査事業「文化遺産調査」で、美術資料の調査が本格化することとなりました。以来10年以上にわたる調査研究の結果、江戸時代から足立には豊かな文化が広がっていたことが明らかとなりました。



村越向栄 十二カ月花卉図屏風 村越向栄による、季節の草花を12カ月ごとに描いた絵を貼りつけた六曲一双の屏風です。
(明治39年・1906頃 当館蔵) 千住仲町で建具屋を営む渋谷家に伝来したもので、本作の発見により「千住の琳派」の調査研究がスタートすることになりました。

千住・足立の文化の成熟と生活への定着

江戸時代後期、千住を拠点とした俳人・絵師の建部巢兆は、琳派絵師の酒井抱一や関東画壇の大家である谷文晁などと親しく交流し、絵や文芸を共に楽しみました。こうした千住・足立と江戸の文人交流は巢兆没後も続き、やがて、江戸の文人たちに影響を受けた船津文淵などの絵師が千住・足立に登場します。
彼らは町の人々の求めに応じて作品を手掛け、その作品は家々を彩る調度品として地域の暮らしの中に根付いていきます。



村越其栄 秋草図屏風
(江戸時代後期 千住河原町 稻荷神社蔵)

千住の琳派絵師、村越其栄は酒井抱一の高弟である鈴木其一から絵を学び、寺子屋「東耕堂」を営みながら地域の暮らしを彩る掛軸や屏風を手掛けました。

本作も青物市場で賑わう千住河原町の鎮守に伝来するもので、地域の絵師として其栄が依頼を受けて制作した背景がわかります。



鈴木其一 画 関屋里元・東耕舎米員 歌 小督局・源仲国図
(天保2年・1831以前 個人蔵・当館寄託)

鈴木其一が絵を描き、千住の狂歌師が正月の歌を詠んだ摺物です。
其一は文化12年・14年(1815・17)の「千住の酒合戦」以後、師の抱一と同様に千住・足立の人々と交わっていました。



船津文淵 四季草花図小襖 上沼田村(現 足立区江北)の大農家船津文淵は江戸の谷文晁に絵を学びました。本作は小右衛門新田(現 足立区中央本町・梅島周辺)の郷土、日比谷家の依頼によって制作されたもので、当家の床の間横の袋戸として使用されました。

村越向栄の作品にみる千住・足立の生活文化

千住の琳派絵師、村越其栄の子の向栄は、其栄の寺子屋「東耕堂」を引き継いで地域の教育を担いながら、父から琳派の画法を学んで、地域の絵師として暮らしを彩る掛軸や屏風を手掛けました。其栄・向栄ら「千住の琳派」の活動を通じて、明治時代に至っても、江戸の酒井抱一・鈴木其一より繋がれた琳派の絵が、千住・足立の生活文化の中に息づいていたことがわかります。

村越向栄 月次景物図
(明治時代 当館蔵)

12カ月各月を象徴する花鳥や各地の名勝が一幅ずつ描かれた作品です。

本作は元々千住の旧家、名倉家に「まくり(表装する前の一枚絵)」の状態で伝来しました。受け取った後、どのような形で使用するかが依頼主に任されていたことがわかります。



村越向栄 四季草花図屏風
(明治時代 当館蔵)

一つの画面の中に、春夏秋冬の草花が描かれています。千住仲町で米穀問屋「川善」を営んでいた渋谷家に伝来しました。向栄による草花図は、渋谷家以外にも千住の家々に伝来しており、千住の人々にいかに親しまれていたのかがわかります。

村越向栄 秋草図
(明治時代 当館蔵)

かもしんてん 掃部新田(現 千住仲町ほか)の開発人である石出家に伝来しました。

向栄の住居は現在の千住仲町公園(足立区千住仲町28-12)付近に位置し、石出家の屋敷のすぐそばにありました。

親しい隣人として、向栄に秋の床の間飾りを依頼したことが想像されます。

